

説明の大切さ

岐阜聖徳学園大学
教育学部教授

玉置 崇



令和六年三月八日に職場で気を失い、病院へ緊急搬送された。検査の結果、心臓への主要な三本の血管につまりがあることがわかり、急遽、冠動脈バイパス手術を受けた。二週間余の入院生活で、さまざまなことを体験した。未来の教員を育てている立場から、病床でも教育について考えることが多々あった。その中から一つ紹介したい。それは、「説明の重要性」だ。救急車の中で意識が戻り、手術前の全身麻酔をするまでに、救急隊員や何人もの医師から説明があったことをよく覚えている。「これほど丁寧にわかりやすく説明してもらえば不安はなくなる」と感じるこの連続だった。

その日の夜には自宅へ戻るだろうと考えていた。しかし、心臓の状態を聞き、命を失っていた可能性があったのだとわかって、驚いた。検査室で、カテーテル治療と

冠動脈バイパス手術が必要という診断を知り、大きな不安に襲われたが、心を落ち着かせてくれたのは、実にわかりやすい説明だった。

例えば、カテーテル検査前には、医師から次の説明があった。

「手首にしか麻酔はしませんが、痛みは心配ありませんよ。その都度、血管や心臓の状態をお伝えします。その場で治療が必要と判断と思えば、同時に治療もしていきます」

気が小さいので、周りにいる医師らの多さ、身体につながっている機器の数、モニターなどを見ただけで心配が増していたが、優しい語り口での素人にもわかりやすい説明を聞き、心配は小さくなった。

「検査の結果は、予想以上に悪い状態です。心臓につながっている大切な三本の血管のうち二本は、ほぼふさがっている状態です。これから心臓専門医らと相談します。お待ちください」「私たちの結論が出ました。玉置さんのために、すぐにバイパス手術をすることが一番だと考えました。それというのも：（略）」

こうした医師団の丁寧な説明を聞けば聞くほど安心ができ、お任せしようと思えた。主治医や麻酔師からも説明を受け、事の大きさを感じながらも大丈夫だと思えた。

主治医から治療方法を聞いた家内も、説明がとても分かりやすく、この方に任せようと思えたと言った。弟は、ネットで執刀医のキャリアを調べ、「執刀数が多くて安心できる医師に執刀してもらえから大丈夫と思ったよ」と後日話してくれた。こうしてネット情報を公開するのも、説明責任を果たす一つである。

さて、学校ではどうか。全てを説明するべきだと思わないうが、あまりにも伝えていない、伝えようとしていない姿勢があるように思う。例えば、新年度になつてのホームページの更新だ。数年前のままの学校が目につく。これでは、「我が校の教育は止まっています」と世間に伝えているのと同じだ。心当たりのある学校はすぐに動いた方がいい。

玉置崇（たまおきたかし）

愛知県小牧市在住。36年間、公立学校で教諭や管理職を経験し、2015年度から岐阜聖徳学園大学で未来の教師を育てている。